

初発の特発性小児ネフローゼ症候群に対するプレドニゾロンによる眼圧への影響と薬学的介入

愛甲佳未¹⁾、舩井佳奈¹⁾、坂本有里恵¹⁾、三輪祐太郎¹⁾、上田里恵¹⁾、福井由美子¹⁾、
田中亮二郎²⁾、加古学¹⁾
兵庫県立こども病院 薬剤部¹⁾、兵庫県立こども病院 腎臓内科²⁾

【目的】プレドニゾロン（PSL）は、特発性小児ネフローゼ症候群（NS）に対する第一選択薬であり、初発時には高用量かつ長期の内服を要する。しかし PSL による副作用は多様で、その早期発見と対策が求められている。なかでもステロイド緑内障は、自覚症状が乏しく、進行すれば視力低下や失明の恐れもあることから、眼圧のコントロールは重要となる。そこで、当院での初発 NS に対する PSL 治療による眼圧への影響について後方視的に検討した。

【方法】2003 年 12 月以降発症の初発 NS 患児 64 名のうち、当院眼科で経時的に眼圧測定を実施されていた 32 名を対象とした。眼圧測定は初回（内服開始 2 週間から 1 ヶ月後）から約 1 ヶ月毎に施行されており、今回は初回から 6 ヶ月までの結果について検討した。また経過中、左右どちらか一方の眼圧が 22mmHg 以上となったものを眼圧高値群、22mmHg 未満のものを眼圧正常群とした。

【結果】対象患児は男児 22 名、女児 10 名で、平均年齢は 5.1 ± 3.2 歳であった。眼圧高値群は 12 名、眼圧正常群は 20 名で、初回の平均眼圧は、全体 20.3 ± 7.3 mmHg、眼圧高値群 26.3 ± 6.3 mmHg、眼圧正常群 15.3 ± 3.1 mmHg であった。眼圧高値群において点眼薬を使用したのは 8 名で、うち 1 名（3 歳男児）は点眼薬を使用しても眼圧コントロール不良であったが、残りの 7 名は点眼薬の使用により徐々に低下傾向を示し、3 ヶ月目には平均眼圧は 19.0 ± 4.8 mmHg になった。また、この 2 群間において年齢、性別に有意な差はみられなかった。

【考察】眼圧が PSL 減量や点眼薬の使用により正常まで回復したことから、眼圧を測定し必要に応じ点眼薬等を用いて眼圧をコントロールすることは、安全に PSL 治療を継続するために必要であると考えられる。しかし眼圧が高く点眼薬が必要となっても、患児が幼く、拒否されることもある。薬剤師が点眼薬の必要性や点眼方法等の指導を行い、眼圧コントロールに携わることは適切な PSL 治療に繋がると考えられる。